

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 315 回 「(株)電気自動車屋日本」的大転換！！

2009.6.7

次代を担う、新たな産業育成が急がれている。その一つが、エネルギーとエコ環境等の低炭素化産業ビジネス、そしてもう一つが、少子高齢化を背景にしたキーワード「安心・安全」の介護・福祉関連ビジネス&防犯・防災ビジネスといわれている。

特に、地球環境・低炭素化社会の実現を目指す、エネルギー環境ビジネス分野は、オバマ大統領がその最重要政策の一つとして「グリーンニューディール」(A Green New Deal)を掲げ、国を挙げて産業育成を目指す姿勢を提唱して、世界中の注目を集めている。

オバマさんには申し訳ないが、現時点、この分野での日本の技術は、アメリカ以上に高水準を保っており、世界のトップクラスとっていいと思う。

例えば、資源のリサイクルの分野...伐採した端材を環境にやさしい固形燃料「ウッドチップ・ペレット化」する技術、てんぷら油から軽油代替エネルギーに変えるBDF(Bio Diesel Fuel)技術、海水や汚水を浄水化(上水 or 中水化)する技術、LED(Light Emitting Diode)型電球・液晶化・ヒートポンプ等省エネ最先端技術を導入した省エネ住宅、省エネビルの開発・普及、ハイブリッド車や電気自動車の開発技術、世界同時促進が予測される、電子力発電所の原子炉開発技術等、現時点でも、「技術大国・日本」は、環境配慮のトップランナーとなるべきポジションに在るといいだろう。

たとえば、大胆な夢企業。電気自動車の開発、販売、普及の為、ハイブリッドのトヨタと技術の日立、電池の三洋電機と供給の東京電力が一緒になって「(株)電気自動車屋日本」なんて会社が出来たらいいかも、勿論地公体と連携して...こんな発想が実現するくらいの、極端なステージ転換が必要となるだろう。

しかしながら、現状で、これらが近い将来、しかもスピーディに、日本を支える基幹産業に成長するか...となると、いささか考えてしまうかもしれない。

というのは、いずれをとっても前例の無い分野、いわば未知のマーケットに挑戦するわけで、何としても不確定要因が多すぎる。しかも、いずれの分野でも新技術を駆使した製品化、商品化というプロセスの中で、大きな設備投資が伴ってくる。大企業ならともかく、中小企業にはしんどい話である。

小社のクライアントも、この分野に果敢にチャレンジしている中小企業がいる。知的財産権をクリアし、複雑な許認可を取得し、いよいよ製品化のため、工場の新設。未知なる分野への設備投資に、国からの支援は全く無く、苦勞に苦勞を重ね、頭の固い銀行団と交渉、何とか資金調達を成功させ、やっと製品化に漕ぎつけた。同時進行で販路の開拓と、資源の安定供給(仕入れ)の確保に全力を投入。工場ラインは動き始め、順調に製品は出来てきたが、何としても、販売が計画通りいかず、資金的に底が見えてきた。先月も、今月も資金繰りに走り回り、四苦八苦で細々と繋いでいる...こんな状態が続き、心身共に疲れきった経営者、果たして、こんな状況で、将来を担うべき新産業の創造・育成が出来るのだろうか?中小企業が得意の技術力を活かし、この分野で活躍できる基盤は、今のところ大変厳しい。

この点が、オバマさんとは大違い、雲泥の差があるのだろう。最初から存在の無い市場を作り上げ、前例の無い販路を開拓し、モデルが無い流通チャンネルと消費パターンを創出するに、これらに関わる研究者、機関、規模関係なく各企業や消費者までに対し、国策として支援を惜しまない姿勢のアメリカは、本気で将来の基幹産業を作り出そうとしている。

日本の場合はこの点に関して、まだまだ政策が不十分であり、施策の実行速度も極端に遅すぎる。金も、人財も、力も乏しい中小企業が、志高く、現時点でこの分野に挑戦したとしても、ことごとく挫折してしまっている。こんな状況で推移する限り、いくらアメリカより技術力が高いと自慢しても、追い越される日は、そう、遠くないと断言できる。何とかすべきと思っているが...実につらい話である!